ダイジェスト版

幼児の生活アンケート

第6回

首都圏の乳幼児をもつ約4,000名の
保護者の方にご協力いただき、
幼児の生活の様子、保護者の子育てに対する
意識や実態を調査しました。
1995年から実施している
過去5回の調査結果と比較することで、
27年間の変化を把握できる
貴重な資料となっております。
このダイジェスト版では、調査結果のなかから
とくに注目したいデータを抜粋してご紹介します。

目次

調査概要・分析枠組みとサンプル数 …… 2
基本属性 …… 3

1. 幼児の生活
① 起床時刻・就寝時刻・睡眠時間 …… 5
② 家を出る時刻・家に帰る時刻 …… 6
③ 家族との食事 …… 7
④ よくする遊び・遊ぶ人 …… 8
⑤ デジタルメディアの利用時間・操作 …… 9
⑥ 習い事 …… 10

2. 母親の意識
① 子育ての意識 …… 11
② 生活満足度・成長満足度 …… 12
③ 子育てで力を入れていること …… 13
④ 子育て観 …… 14
⑤ 園への要望 …… 15
⑥ しつけや教育の情報源 …… 16

3. 子育てサポート
① 子どもの面倒をみてくれる人・対象 …… 17
② 父親の関与／家事・育児分担 …… 18

4. 自由記述からみえてきたこと …… 19

ベネッセ教育総合研究所

調査概要

■調査テーマ

乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態

■調査方法

第１回～第５回は郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
第６回はWEB調査法

■調査時期

第１回調査　1995年２月
第２回調査　2000年２月
第３回調査　2005年３月
第４回調査　2010年３月
第５回調査　2015年２～３月
第６回調査　2022年３月

■調査対象

第１回調査（95年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の１歳６か月～６歳就学前の幼児をもつ保護者1,692名（配布数3,020通、回収率56.0%）

第２回調査（00年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）、および地方都市（富山市・大分市）の１歳６か月～６歳就学前の幼児をもつ保護者3,270名（配布数5,600通、回収率58.4%）

＊経年での比較を行うために、地方都市の回答を分析から除外している。

第３回調査（05年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980名（配布数7,200通、回収率41.4%）

第４回調査（10年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ保護者3,522名（配布数7,801通、回収率45.1%）

第５回調査（15年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ保護者4,034名（配布数11,384通、回収率35.4%）

第６回調査（22年）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の０歳６か月～６歳就学前の乳幼児をもつ母親4,030名（子どもの年齢と性別をもとに均等割付）

■調査項目

子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとのかかわり／遊び／母親の教育観・子育て観／今、子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／父親の家事・育児分担／子育て支援など

＊調査項目は経年比較が可能なように配慮したが、時代の変化に合わせて、追加・削除などの変更を行っている。

分析枠組みとサンプル数

※今回の分析対象は、１歳６か月以上

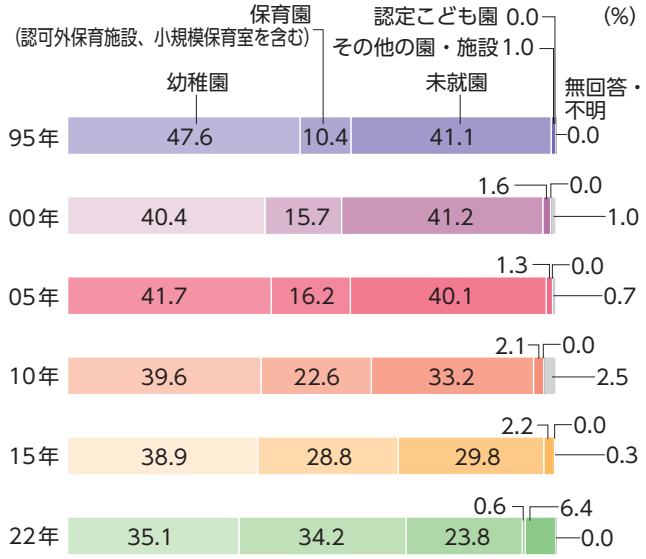
経年調査	調査年	性別＼年齢	０歳児	１歳児 月齢不明	１歳児 １歳前半	１歳児 １歳後半	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児	６歳児	分析対象サンプル数
第１回	95年	男	—	—	—	55	222	151	176	110	89	1,659
		女	—	—	—	69	228	152	201	104	102	
第２回	00年	男	—	—	—	88	239	122	127	125	124	1,570
		女	—	—	—	83	232	124	96	104	106	
第３回	05年	男	160	12	163	150	369	161	159	150	137	2,258
		女	164	11	163	150	361	172	148	172	129	
第４回	10年	男	149	—	128	142	237	267	280	236	255	2,839
		女	170	—	145	123	242	270	281	258	248	
第５回	15年	男	138	—	141	165	253	272	284	307	330	3,287
		女	130	—	142	140	311	322	297	322	284	
第６回	22年	男	155	—	155	155	310	310	310	310	310	3,410
		女	155	—	155	155	310	310	310	310	310	

●データを読む際の注意点

①今回の分析では、１歳６か月以上の幼児をもつ**母親の回答のみ**を分析している。
②０歳は０歳６か月～０歳11か月、１歳前半は１歳０か月～１歳５か月、１歳後半は１歳６か月～１歳11か月を指す。
③データの精度を高め、経年での比較を可能にするため、比推定を用い、調査対象の属性別構成比を現実に合わせた。比推定で用いるウェイトは、子どもの性別（２区分）×子どもの年齢別（６区分）の12区分に分割して、４都県の人口推計に基づいて作成した。今回の百分率（%）は、このウェイトをつけて算出されている。
④図表で使用している百分率（%）は、小数点第２位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
⑤22年はWEB調査のため無回答はないが、他項目と検討した際に回答が不明なケースは「無回答・不明」としている。
⑥経年比較の際は、第１回（95年）～第５回（15年）は無回答・不明は表示している。ただしあまりにも無回答・不明が多い場合は欠損値化して比較を行っている。

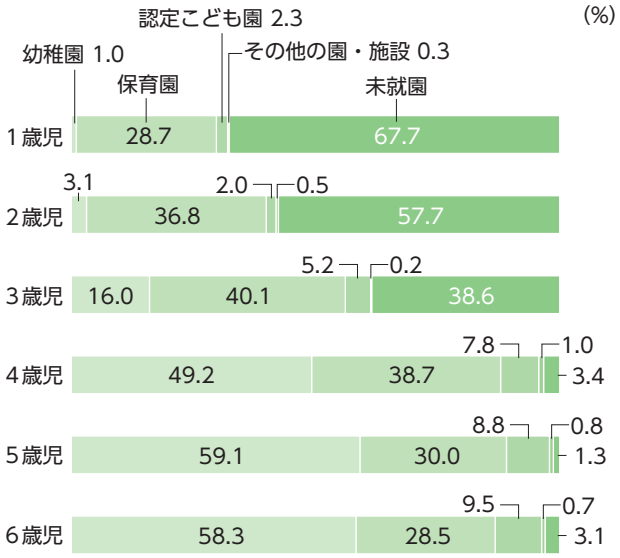
基本属性

●子どもの就園状況（経年比較）



※認定こども園は 22 年調査のみたずねている。

●子どもの就園状況（22年 年齢別）

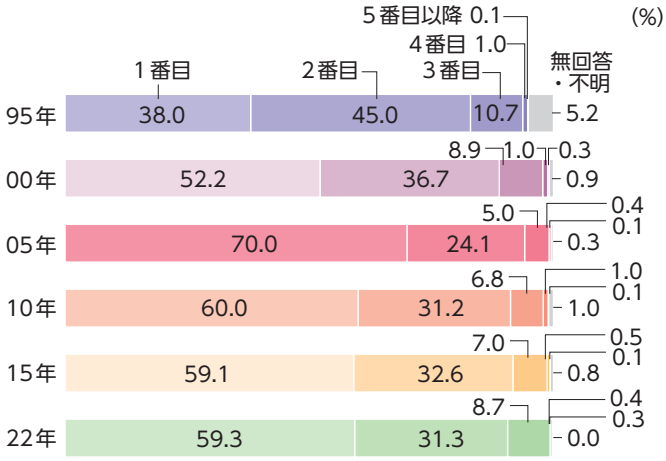


●子どもの平均きょうだい数（経年比較）

調査年	平均値（人）
95 年	2.04
00 年	1.96
05 年	1.74
10 年	1.86
15 年	1.80
22 年	1.62

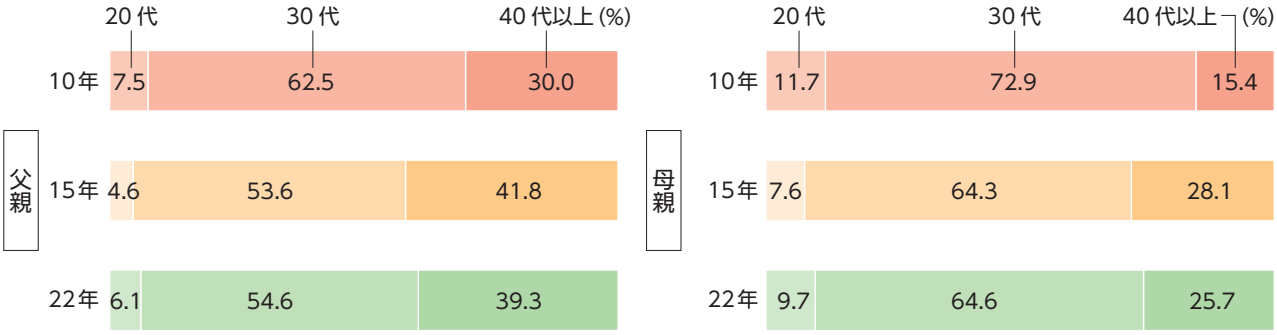
※無回答・不明の人は、分析から除外している。
※きょうだい数「5 人以上」は 5 人として算出した。

●子どもの出生順位（経年比較）



※この調査となる「お子様も含めて」とたずねた。

●父母の年齢（経年比較）



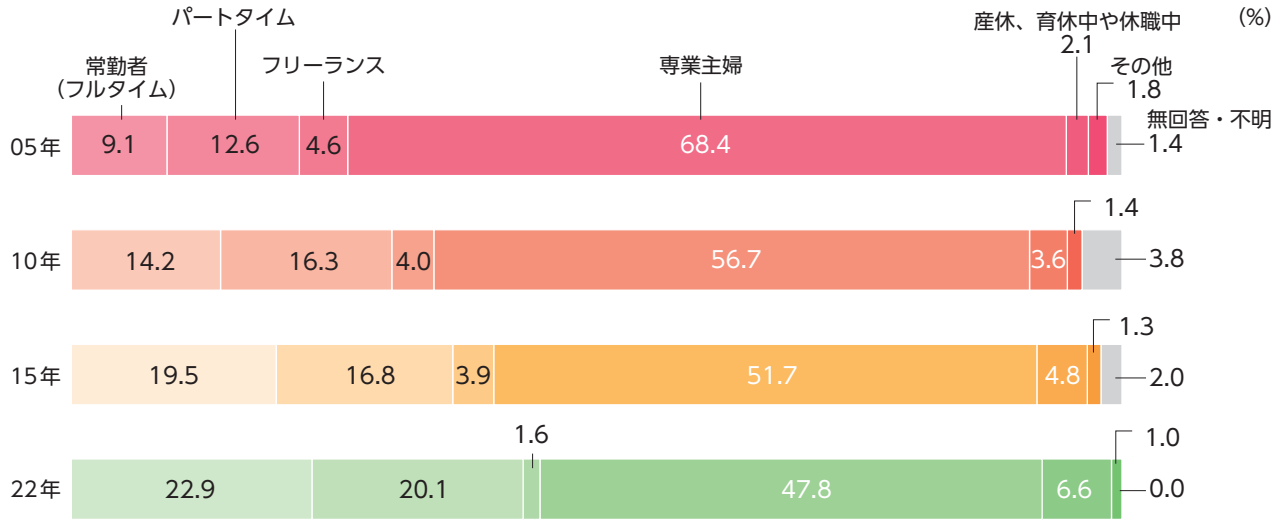
●父母の平均年齢（経年比較）

（歳）

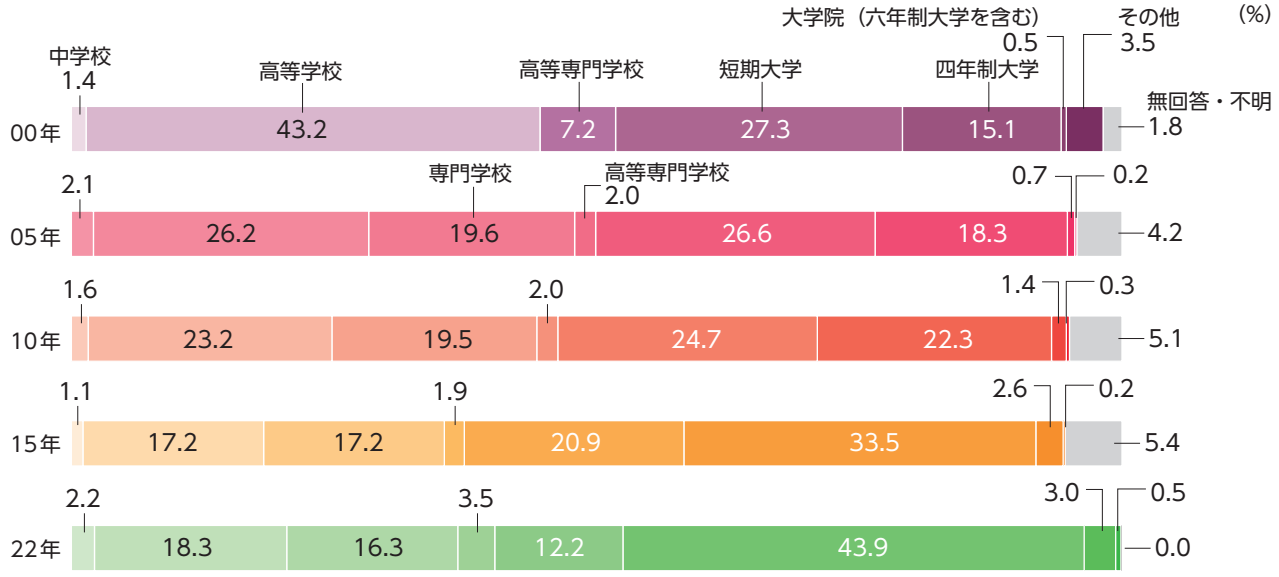
（平均値）	10 年	15 年	22 年
父親の年齢	36.9	38.5	38.3
母親の年齢	35.0	36.5	36.1

※父親がいない人は分析から除外している。
※無回答･不明の人は、分析から除外し算出した。

●母親の就業状況（経年比較）

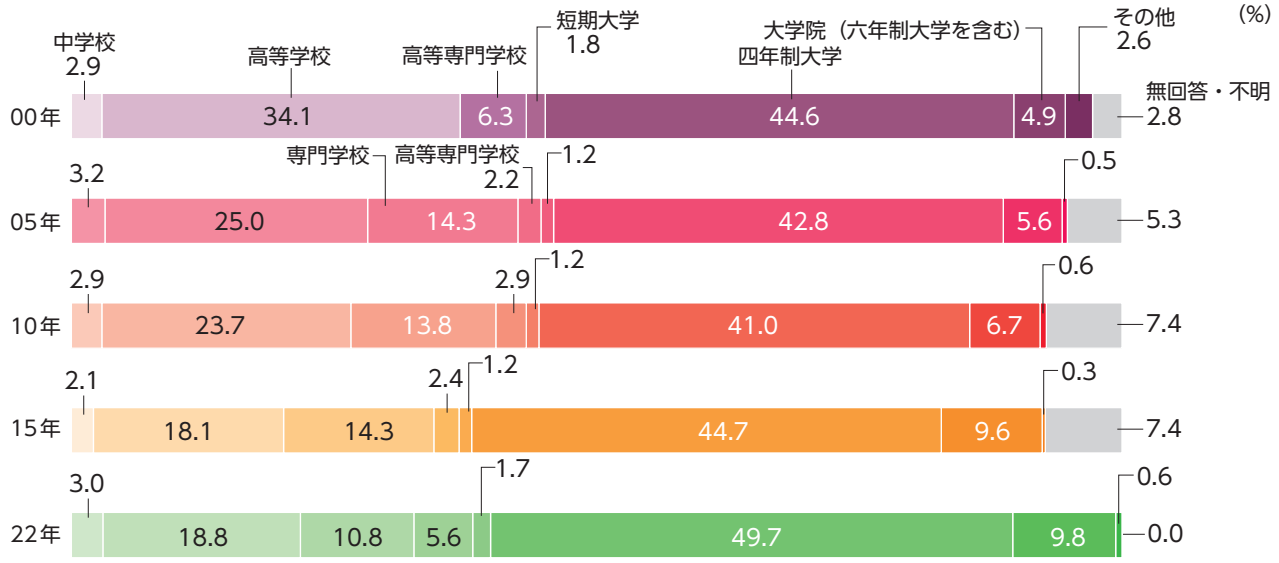


●母親の最終学歴（経年比較）



※「専門学校」は 00 年調査では、たずねていない。

●父親の最終学歴（経年比較）



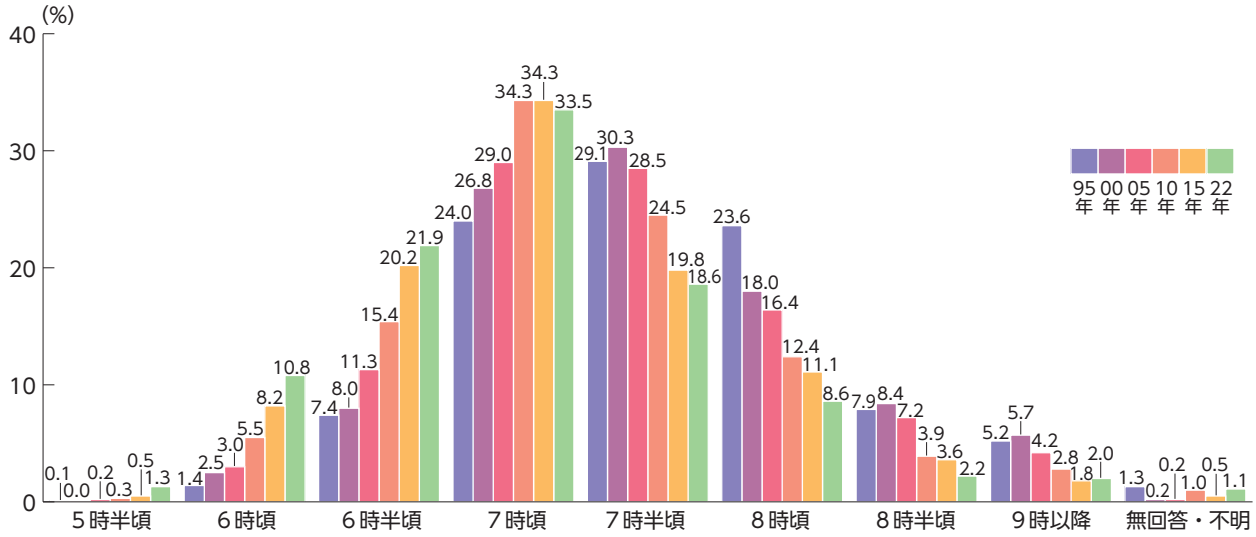
※「専門学校」は 00 年調査では、たずねていない。

早寝早起きの傾向がますます強まった

95年以降、6時台の起床が増え続け、7時半台以降の起床は減る傾向にある。「7時頃」以前に起床する幼児が半数を超え、とくに早起きの傾向が強まっている。21時以降に就寝する比率も減少し、95年以降でもっとも早寝早起きとなった。

Q 平日何時頃に起きますか。

図1－1－1　平日の起床時刻（経年比較）



Q 平日何時頃に寝ますか。

図1－1－2　平日の就寝時刻（経年比較）

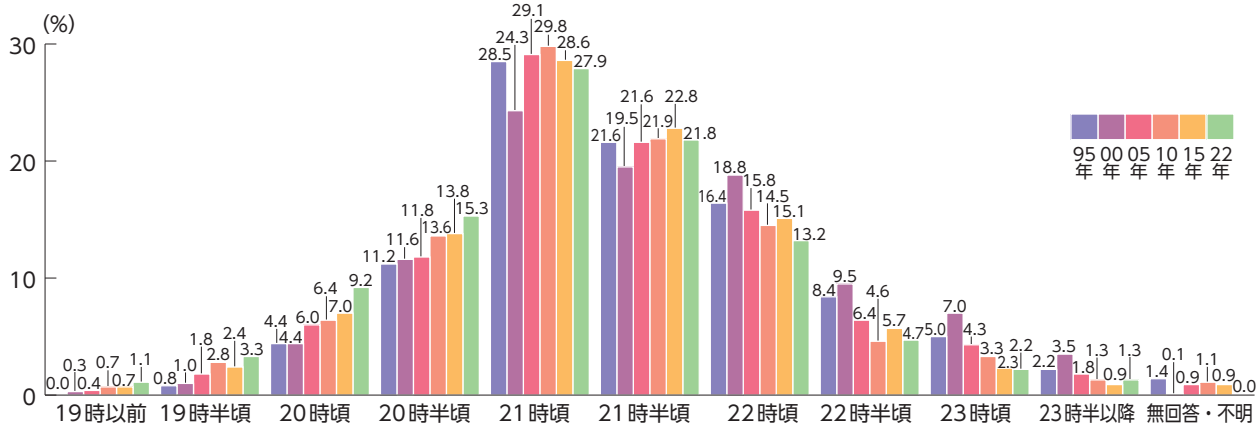


図1－1－3　就園別起床・就寝時刻など

	低年齢児×未就園		低年齢児×保育園		高年齢児×保育園		高年齢児×幼稚園	
	15年	22年	15年	22年	15年	22年	15年	22年
起床時刻	7:24	7:18	6:48	6:48	6:54	6:54	7:06	7:00
昼寝の時間	1.3	1.2	2.0	1.8	1.2	0.9	0.2	0.2
就寝時刻	21:12	21:06	21:30	21:18	21:36	21:30	21:00	20:54
睡眠時間	10.2	10.3	9.3	9.5	9.3	9.4	10.1	10.0

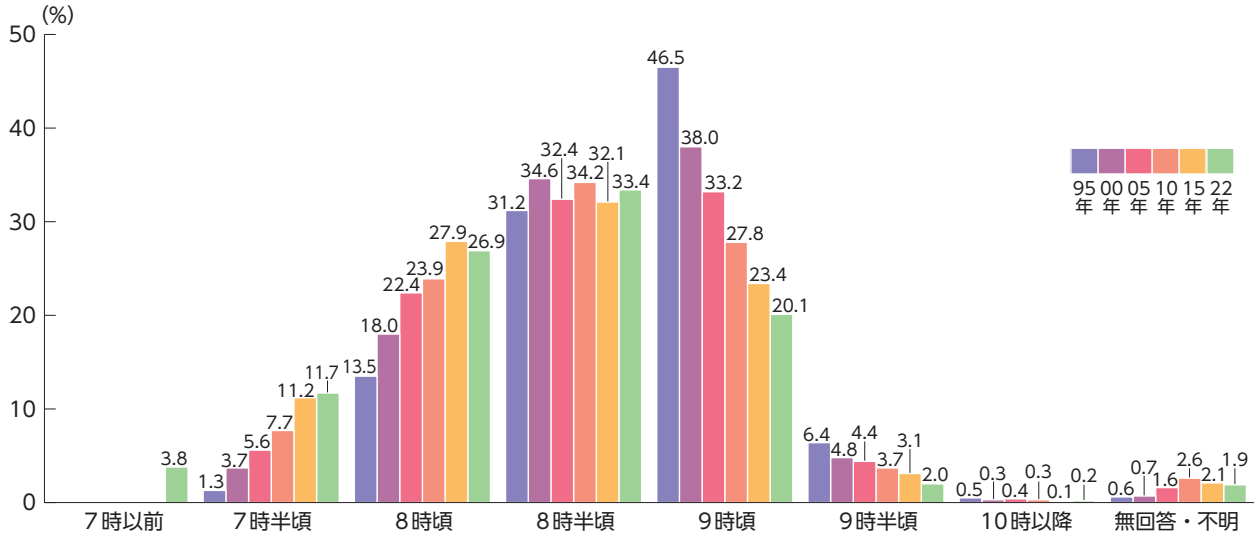
15年と同様、早寝早起きの傾向が見られた。「6時頃に起床する」が、15年から増え（8.2％→10.8％）、7時頃以前に起床する幼児の割合は67.5％（図1－1－1）。就寝時刻は、「20時頃」で、2.2ポイント、「20時半頃」が1.5ポイント増え、21時以降に就寝する割合は減少していた（図1－1－2）。15年、今回ともに、保育園児のほうが幼稚園児より起床時刻が早く、睡眠時間が短い傾向にある（図1－1－3）。

園で過ごす時間は保育園児9.3時間、幼稚園児6.2時間

今回初めて「7時以前」が登場し、「8時半頃」以前に家を出る傾向が強まっている。「家に帰る時刻」は、14時～15時台が大幅に減り、17時・18時台が増えている。保育園児は幼稚園児に比べて、「園で過ごす時間」が約3時間長くなっている。

Q 保育園・幼稚園などに行くために何時頃、家を出ますか。

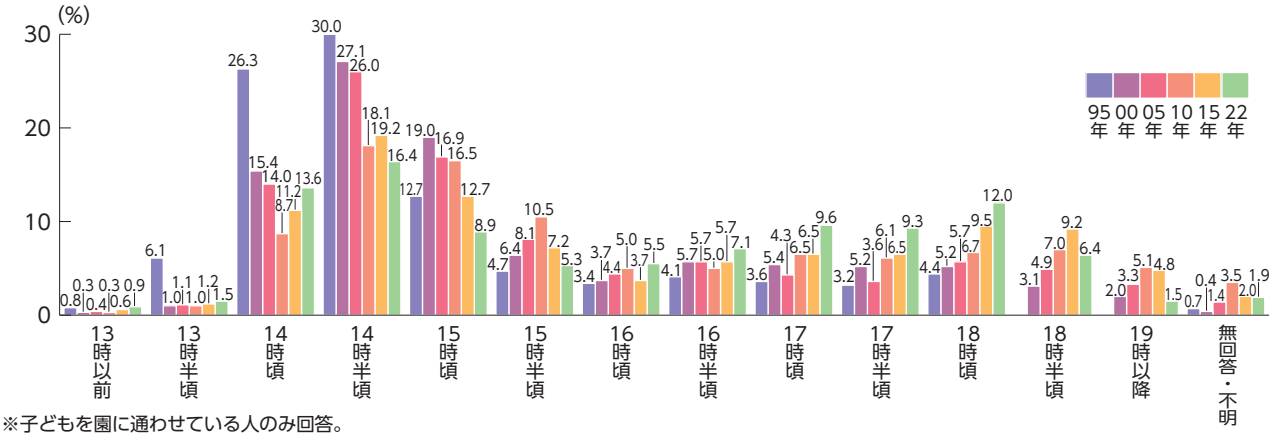
図1－2－1　家を出る時刻（経年比較）



※子どもを園に通わせている人のみ回答。

Q 普段、幼稚園・保育園などから何時頃、帰宅しますか。

図1－2－2　家に帰る時刻（経年比較）



※子どもを園に通わせている人のみ回答。

図1－2－3　園で過ごす時間

	低年齢児×保育園		高年齢児×保育園		高年齢児×幼稚園	
	15年	22年	15年	22年	15年	22年
通園：家を出る時刻	8:06	8:06	8:06	8:06	8:36	8:30
通園：帰宅する時刻	17:42	17:24	17:42	17:24	14:48	14:48
家の外にいる時間	9.6	9.3	9.5	9.3	6.2	6.2

※子どもを園に通わせている人のみ回答。
※低年齢児は1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢児は4歳～6歳11か月の幼児。
※「園で過ごす時間」は、「帰宅する時刻－家を出る時刻」で算出している。

「家を出る時刻」の「9時頃」は、95年以降、減り続けている。「7時以前」「7時半頃」が増えていて、全体的に家を出る時刻が早まっている（図1－2－1）。「家に帰る時刻」は、14時半台～15時台が減っている一方で、17時台が約5.9ポイント、18時頃が2.5ポイント増え、95年以降、それぞれもっとも高い割合となった（図1－2－2）。「家の外にいる時間」を「園で過ごす時間」とすると、その平均値は、幼稚園児6.2時間、保育園児（低年齢児・高年齢児問わず）9.3時間となっている。（図1－2－3）。

「ほとんど毎日家族みんなで食事をする」が増加し、6割を超える

家族みんなで食事をする頻度について「ほとんど毎日」と答えた方の割合が15年から13ポイント増えた。母親の就業形態問わず増えているが、とくに「専業主婦」において大きく増えている。「父親の帰宅時間」が、18時～20時台で増え、21時台以降は減っており、15年に比べて帰宅時間が早まった。

Q あなたのご家庭では、次のようなことをどれくらいしますか。

図1－3－1　家族みんなで食事をする（経年比較）

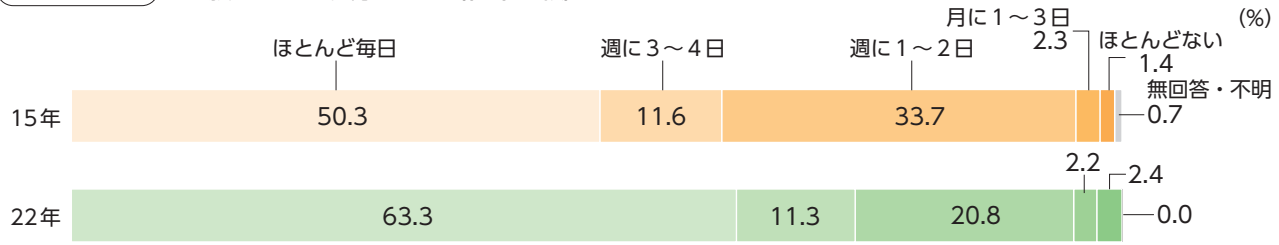
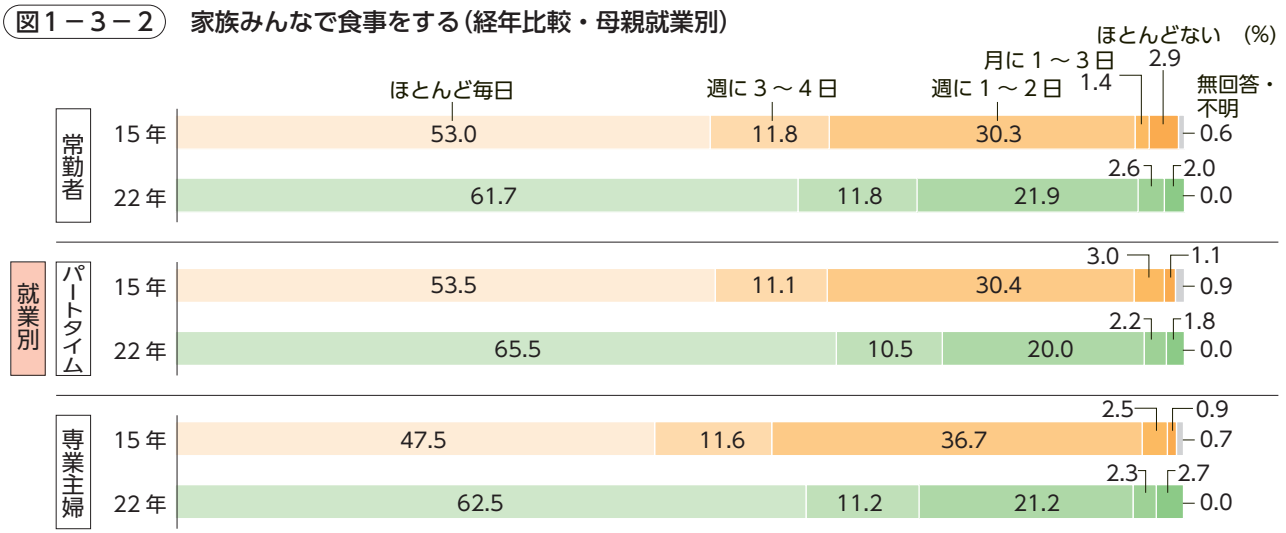
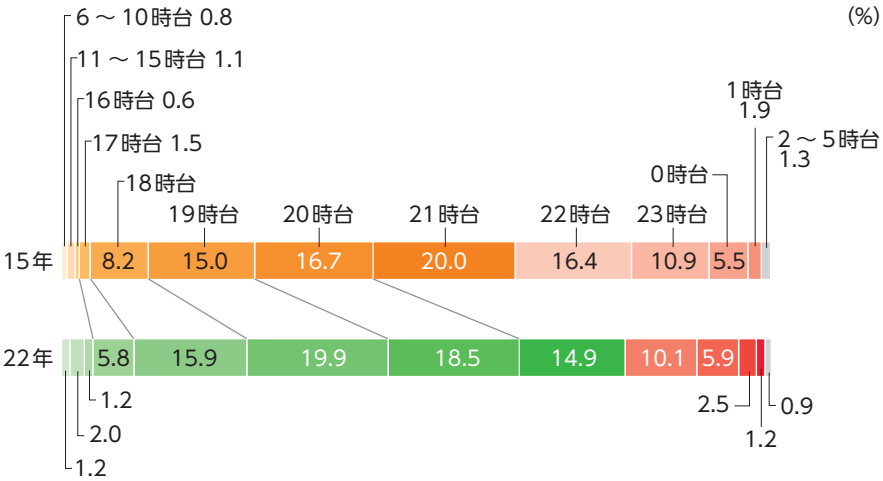


図1－3－2　家族みんなで食事をする（経年比較・母親就業別）



Q お子様の父親は働いている日、平均して何時頃帰宅しますか。

図1－3－3　父親の帰宅時間（経年比較）



※「わからない・働いていない」「無回答・不明」は欠損値化して算出。

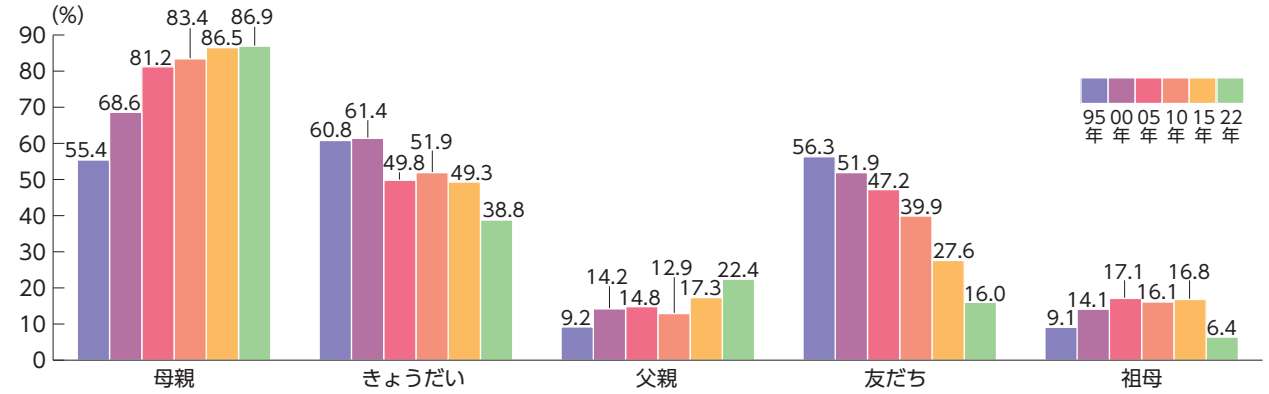
家族みんなで食事をする頻度について「ほとんど毎日」が13ポイント増え（50.3%→63.3%）、「週に1～2日」が約13ポイント減った（33.7%→20.8%）（図1－3－1）。とくに「専業主婦」において「ほとんど毎日」が15ポイントのびている（図1－3－2）。父親の帰宅時間が18時～20時台で約14ポイント増え（39.9%→54.3%）、21時台以降は約20ポイント減っている（56%→35.5%）（図1－3－3）。父親の帰宅時間が早まることで、家族で食事ができる環境になったのかもしれない。

平日一緒に遊ぶ相手で、「母親」「父親」は増加し「きょうだい」「友だち」は減少

幼稚園・保育園・こども園以外で、平日一緒に遊ぶ人は、「母親」「父親」が増加する一方で、「友だち」「きょうだい」「祖母」が減少している。とくに「友だち」は95年から40.3ポイント減少しており、平日、降園後に友だちと遊ぶ機会が減っていることがわかった。

Q 平日（幼稚園、保育園、こども園以外で）遊ぶときは誰と一緒の場合が多いですか。

図1－4－1　平日、（幼稚園・保育園・こども園以外で）一緒に遊ぶ人（経年比較）



※複数回答。　※「その他」を含む9項目の中から、5項目を図示。

Q お子様はどのような遊びをよくしていますか。

図1－4－2　よくする遊び（経年比較）

(%)

	95年	00年	05年	10年	15年	22年
公園の遊具（すべり台、ブランコなど）を使った遊び	66.0	68.4	76.1	78.3	80.1	85.8
つみ木、ブロック	54.9	56.0	62.8	68.0	68.5	66.4
ユーチューブをみる						58.7
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2	54.0	57.2	57.1	61.6	54.7
絵やマンガを描く	45.0	43.7	57.4	53.4	50.6	48.6
ボールを使った遊び（サッカーや野球など）	35.0	33.1	46.7	46.8	46.5	47.6
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	44.0	45.3	46.3	49.5	47.1
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.6	51.7	53.6	49.4	45.8	44.0
砂場などでのどろんこ遊び	49.7	52.1	57.5	53.6	48.1	43.7
動画・録画を見る（ユーチューブ以外）						40.6
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	34.2	37.6	40.5	40.9	40.2
ジグソーパズル	21.7	18.1	28.7	32.8	33.1	40.1
マンガや本（絵本）を読む	29.8	28.3	44.7	44.3	43.8	39.0
おにごっこ、缶けりなどの遊び	14.0	13.8	21.0	23.4	27.9	31.2
テレビゲーム・携帯ゲーム						27.3
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.5	17.9	26.0	25.7	27.5	25.1
知育・学習目的のアプリ						23.8
なわとび、ゴムとび	14.2	12.7	19.1	21.2	20.7	21.4
娯楽を楽しむアプリ（遊びやゲーム）						14.4
情操を育むアプリ（物語や音楽など）						8.5
その他	7.2	9.2	13.4	10.3	9.8	1.2
無回答・不明	1.6	1.0	0.6	0.6	0.0	

子どもの就園状況別
22年　高年齢児

(%)

幼稚園児	保育園児
84.2	84.7
59.9	50.4
63.7	57.1
55.9	48.1
57.3	48.5
48.2	43.3
39.9	42.6
55.2	47.6
41.6	31.8
42.2	41.6
40.0	32.2
44.2	38.4
41.9	36.4
43.4	38.4
43.8	33.5
40.9	34.1
30.9	27.8
39.2	24.7
21.3	17.3
7.9	8.4
1.3	2.2

※複数回答。　※項目は22年調査結果の降順に図示。

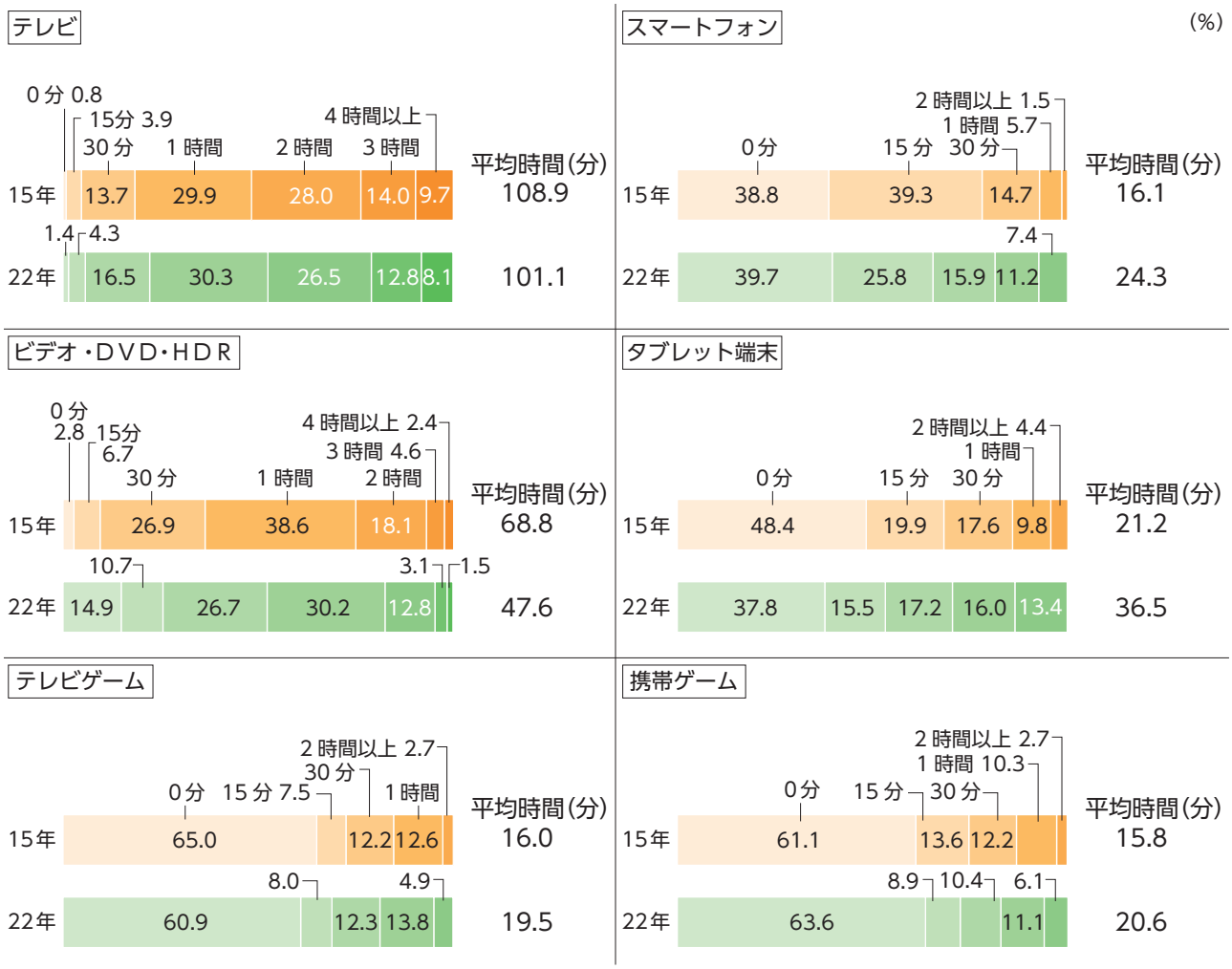
平日、降園後に一緒に遊ぶ相手では、27年間で母親が31.5ポイント、父親が13.2ポイント増加し、友だちが40.3ポイント、きょうだいが22.0ポイント減少している（図1－4－1）。よくする遊びについて、27年間の変化をみると、1位「公園の遊具（すべり台、ブランコなど）を使った遊び」と2位「つみ木、ブロック」の上位2項目に変化はない。また半数以上の幼児が「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」をしていることも変わらない。一方、「砂場などでのどろんこ遊び」は、10年まで半数近くを占めていたが、22年は43.7%に減少している。22年では「ユーチューブをみる」が58.7%で3位となり、遊びの内容が変化している様子がうかがえる（図1－4－2）。

7年間で、タブレット端末の1日の使用時間が増加

15年から22年の変化をみると、テレビ、ビデオ・DVD・HDRの視聴時間は減少し、スマートフォン、タブレット端末は増加した。22年では、スマートフォンを1日1時間以上使用(視聴)する比率は18.6%、タブレット端末の比率は29.4%。

Q お子様は、次のものを1日あたりどれくらいの時間、使ったり、みたりしますか。

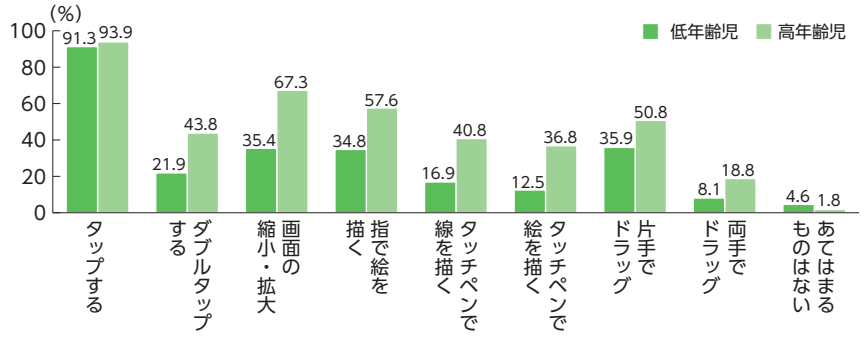
図1－5－1　メディアの1日の視聴・使用時間(経年比較)



※無回答・不明は欠損値化して算出している。　※家族がそのメディアを所有する人のみの数値。

Q お子様は、次のものをどのくらい操作できますか。

図1－5－2　タブレット端末でひとりでできること(22年)



※複数回答。　※家族がタブレット端末を所有する人のみの数値。

タブレット端末でひとりでできることでは、低年齢児・高年齢児ともに「タップする」は9割を超えた。次いで高年齢児で半数以上を占めるのは「画面の縮小・拡大」「指で絵を描く」「片手でドラッグ」である。低年齢児では、「画面の縮小・拡大」「指で絵を描く」「片手でドラッグ」は3割台であった(図1－5－2)。

習い事をしている比率は、7年間で7.7ポイント減少している

習い事をしている比率は、95年に比べて13.0ポイント減少し、40.7%であった。15年から22年にかけて、1～6歳児のいずれの年齢でも減っている。

Q お子様は現在、習い事・おけいこ事をしていますか（幼稚園・保育園・こども園で有料で習っているものを除く）。

図1－6－1　習い事をしている比率（経年比較）

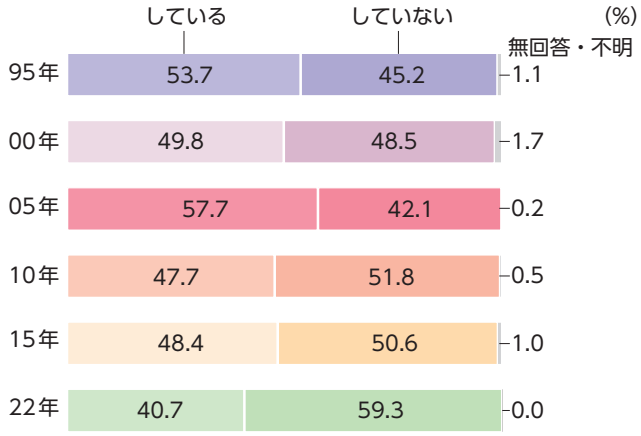
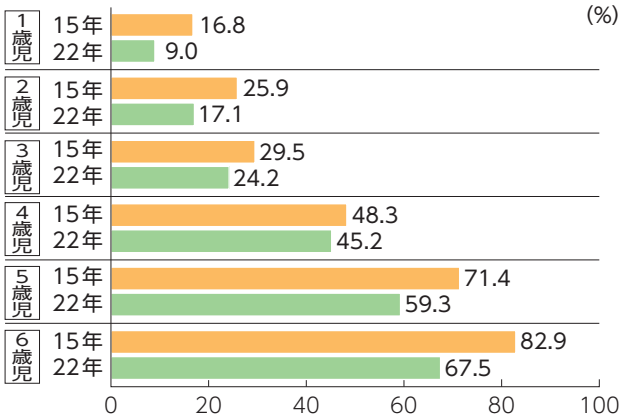


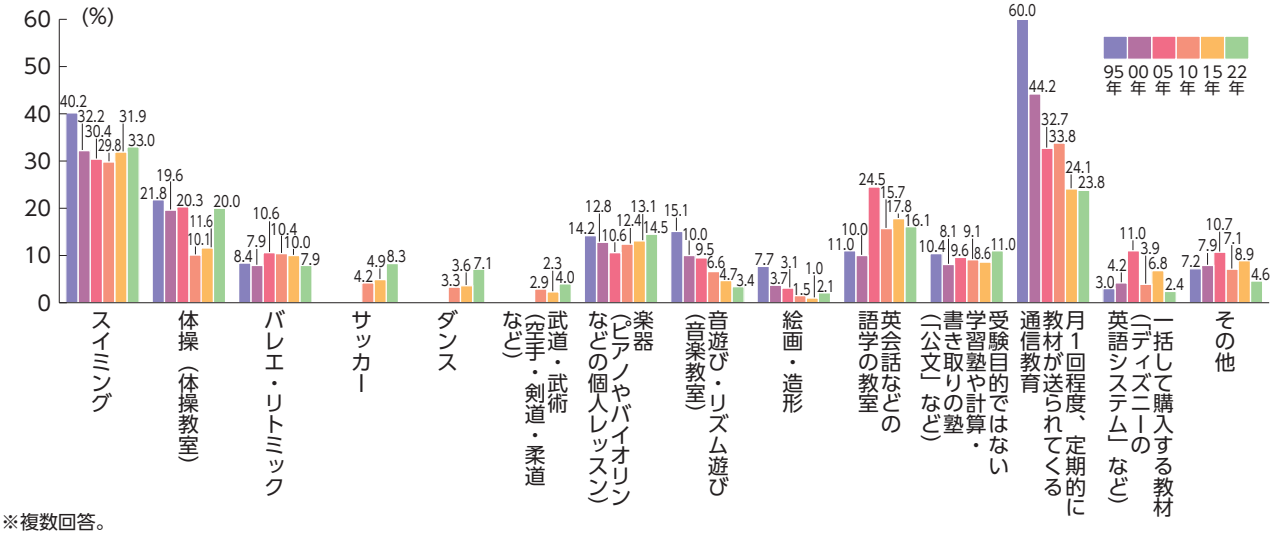
図1－6－2　習い事をしている比率（子どもの年齢別 経年比較）



※「している」の%。　※1歳児は1歳6か月以上を分析。

Q どのような習い事・おけいこ事をしていますか（幼稚園・保育園・こども園で有料で習っているものを除く）。

図1－6－3　習い事の種類（経年比較）



※複数回答。
※「現在、習いごとをしている」と回答した保護者のみをサンプルとしている。
※10年調査で項目名を変更した。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操（体操教室）」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」。「リトミック」（集計は経年比較するために合算）。「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び（音楽教室）」、「絵画の教室」→「絵画・造形」。
※「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」は、22年はこどもちゃれんじとそれ以外の通信教育を足した%。
※「タブレット教材」「プログラミング・ロボット製作」「無回答・不明）」は図示を省略。

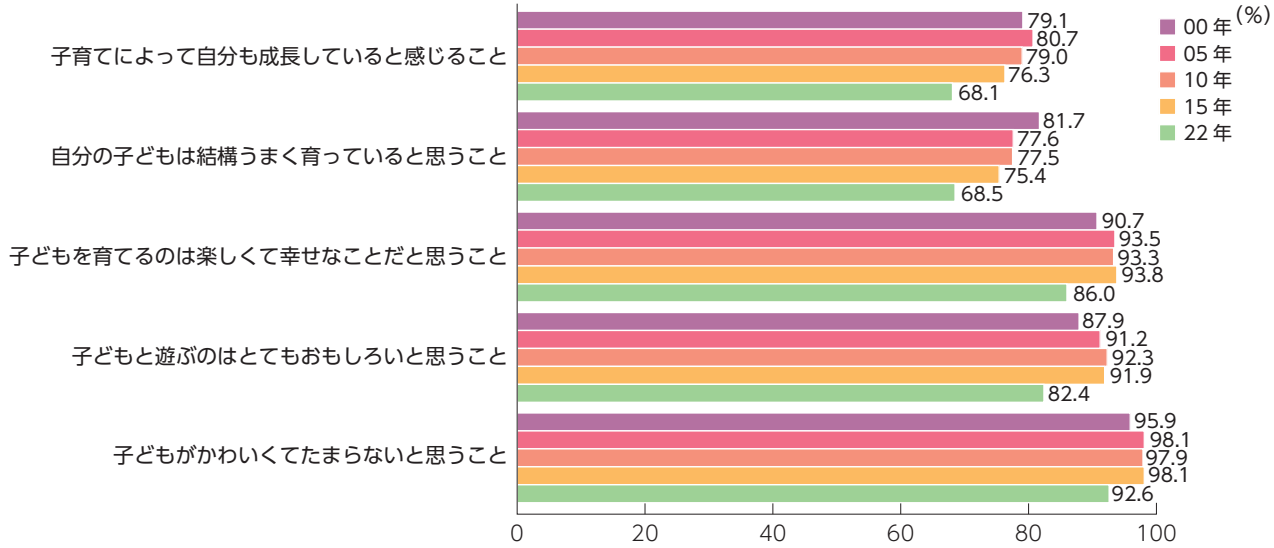
習い事やおけいこ事をしている比率は、10年以降半数を下回っており、22年は40.7%と、27年間でもっとも低い（図1－6－1）。年齢別に22年の調査結果をみると、1歳児が9.0%ともっとも低く、6歳児が67.5%ともっとも高くなっている。15年から22年の変化では、5、6歳児の減少幅が大きく、5歳児は12.1ポイント減少し、6歳児では15.4ポイント減少した（図1－6－2）。22年の習い事の種類では、「スイミング」33.0%がもっとも高い比率であった（図1－6－3）。

子育てへの肯定的な感情が減少した一方で、否定的な感情が大幅に増加した

15年から22年にかけて、母親の子育てへの肯定的な感情(「子育てによって自分も成長していると感じること」など)が減少した。その一方で、子育てへの否定的な感情が大幅に増加した。とくに、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」は20.5ポイントも増加し、約6割に達している。

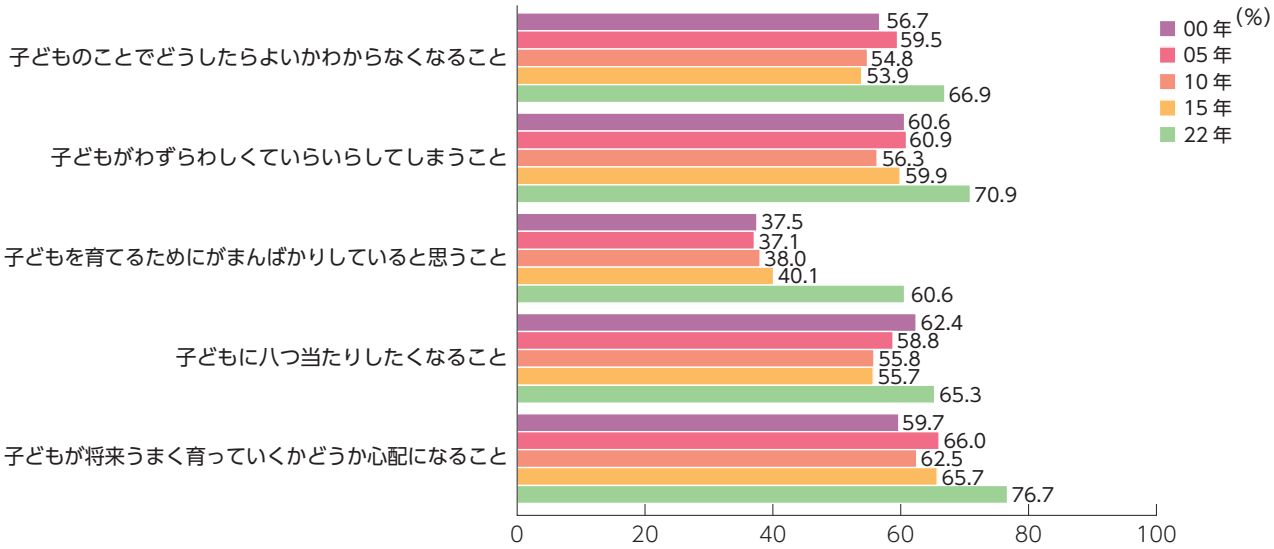
Q あなたは最近、子育てやあなた自身のことについて次のようなことを感じることがありますか。

図2－1－1　子育ての肯定的な感情(経年比較)



※「よくある＋ときどきある」の%。

図2－1－2　子育ての否定的な感情(経年比較)



※「よくある＋ときどきある」の%。

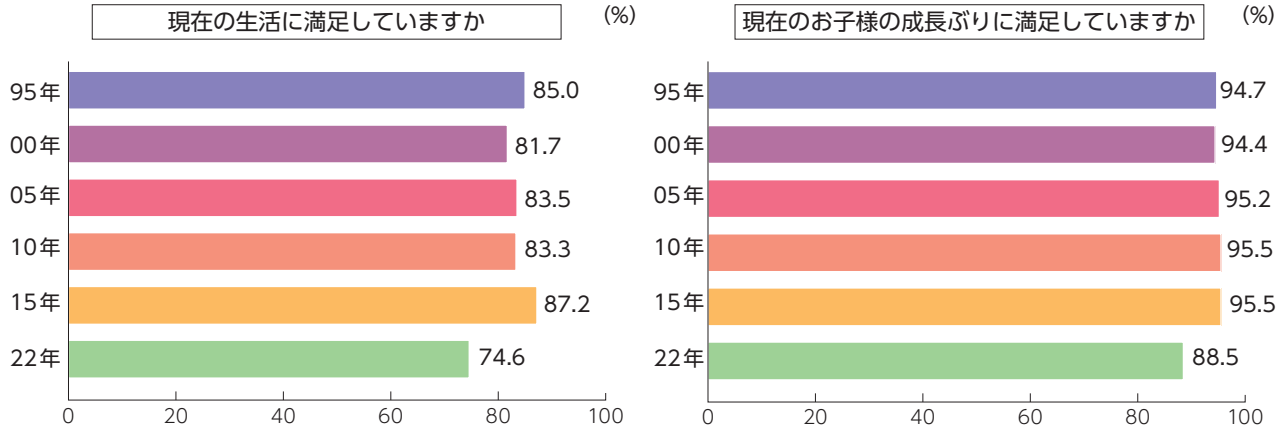
15年から22年にかけて、子育てへの肯定的な感情はいずれも減少している（図2－1－1）。一方で、子育ての否定的な感情は、いずれも約10ポイント以上増加している（図2－1－2）。全体的に、母親の子育てに対する肯定的な感情は薄れ、否定的な感情へと変化している様子がうかがえる。なお、母親の属性別に15年から22年にかけての意識の変化の大きさをみてみると、とくに、常勤者やパートタイムなどの働く母親の間で、否定的な感情が高まっているようだ（図表省略）。

15年から22年にかけて、現在の生活や子どもの成長に対する満足度が低下

15年から22年にかけて、「現在の生活に満足している」「子どもの成長ぶりに満足している」比率が低下している。これらを、母親の就業ごとに、子どもの面倒をみてくれる人がいるかどうかで比較してみると、いずれの働き方においても、面倒をみてくれる人がいるほど、満足度が高い。

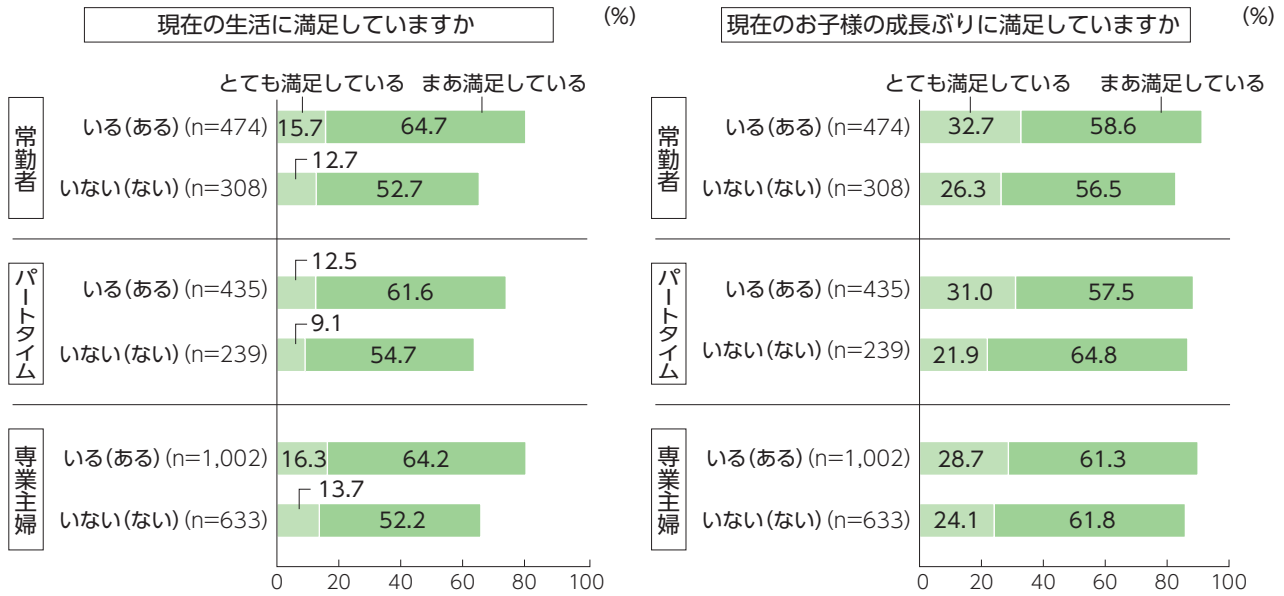
Q あなたの現在の生活や子育ての満足度についてお聞きします。

図2－2－1　現在の生活や子どもの成長に対する満足度（経年比較）



※「とても満足している＋まあ満足している」の%。

図2－2－2　現在の生活や子どもの成長に対する満足度（母親の就業×子どもの面倒をみてくれる人の有無別）



※「あなたが家を空けるとき、子どもの面倒をみてくれる人（機関・サービス）がいますか（ありますか）」という設問で、「いる（ある）」とした群と「ない（いない）」とした群とに分けて満足度を算出した。

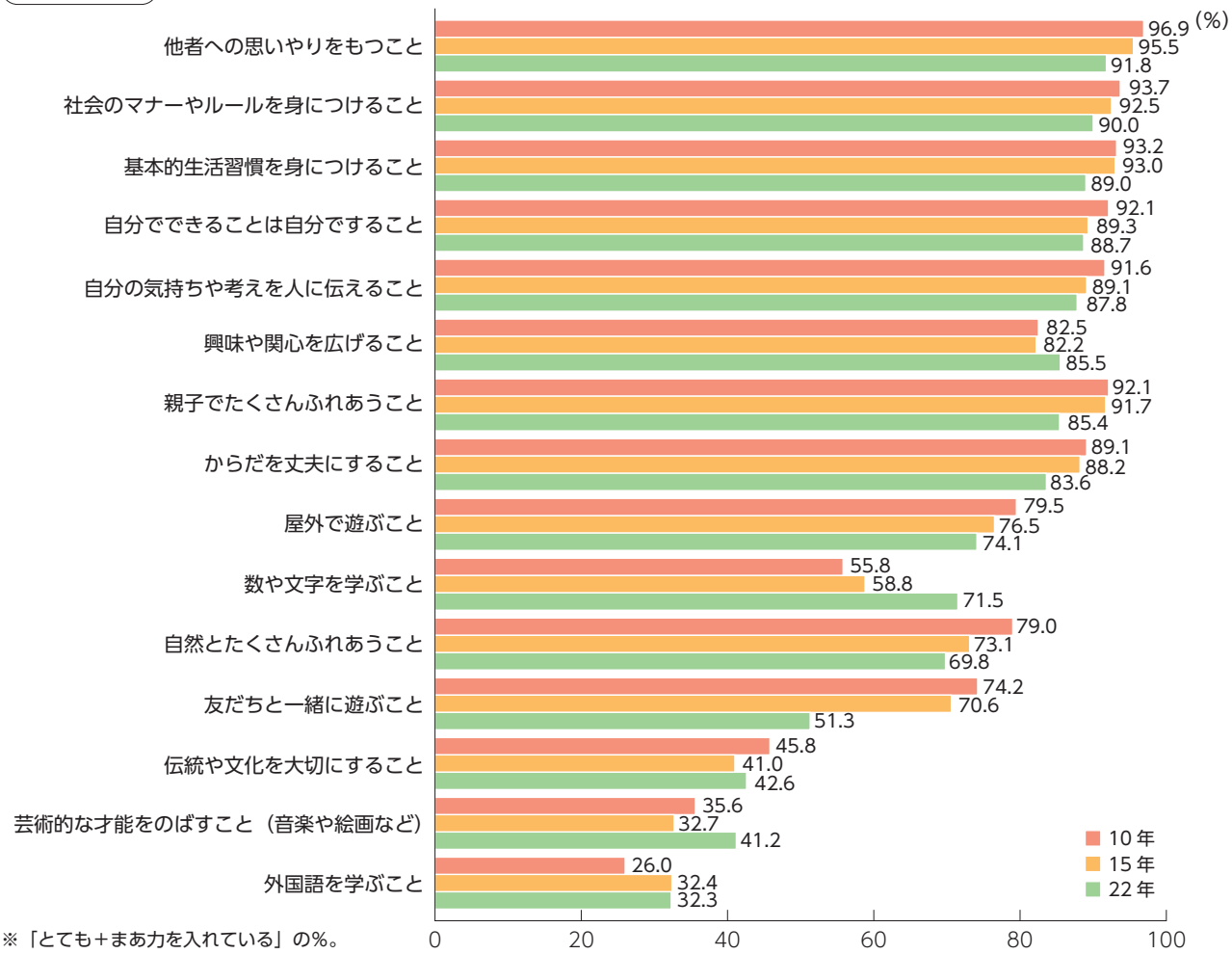
母親に現在の生活や子どもの成長に満足しているかをたずねた。15年から22年にかけて、「現在の生活に満足している」比率は12.6ポイント減少、「子どもの成長ぶりに満足している」比率は7.0ポイント減少している。（図2－2－1）。それぞれの満足度について、母親の就業ごとに、子どもの面倒をみてくれる人がいるかどうかで比較したところ、いずれも、子どもの面倒をみてくれる人がいる人ほど、満足度が高い（図2－2－2）。子育てをサポートしてくれる人がいるかどうかは、母親の就業の違いによらず、母親の満足度を保つ効果があるのかもしれない。

子育てで「数や文字を学ぶこと」に力を入れている比率は増加

この7年間で、「数や文字を学ぶこと」「芸術的な才能をのばすこと（音楽や映画など）」に力を入れている比率は増加した。「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」は、05年から徐々に増えている。

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子様を育てていますか。

図2－3－1　子育てで力を入れていること（経年比較）



※「とても＋まあ力を入れている」の%。

Q 子育てに関する2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。どちらかといえば近いほうの意見を選んでください。

図2－3－2　早期教育に関する子育て観（経年比較）

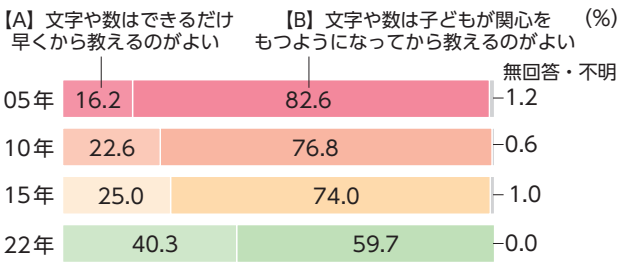
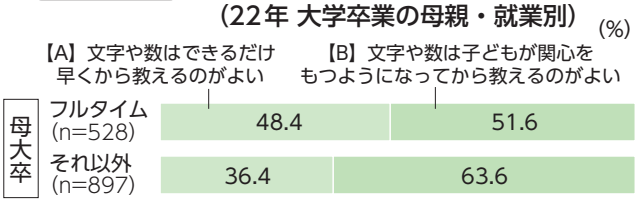


図2－3－3　早期教育に関する子育て観（22年 大学卒業の母親・就業別）



※大学卒業は大学・大学院を含む。
※母親の就業における「それ以外」はパートタイム、専業主婦、フリーランス、育休中、休職中などを含む。

7年前に比べて、全体的に子育てで力を入れていることは減少傾向にある。コロナ禍ということもあり、とくに「友だちと一緒に遊ぶこと」は約20ポイント減少した。その一方で、「数や文字を学ぶこと」「芸術的な才能をのばすこと（音楽や映画など）」に力を入れている比率は増加している（図2－3－1）。また、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考えている母親は、05年以降徐々に増えている（図2－3－2）。とくに、早期教育意向をもっているのは、大学卒業のなかでも「フルタイム」の母親に多くみられる（図2－3－3）。

「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」が増加

22年には「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」が半数を超えた。また、7年前に比べて、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」は約10ポイント増加した。

Q 子育てに関する2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。どちらかといえば近いほうの意見を選んでください。

図2－4－1　子育て観：3歳児神話（経年比較）

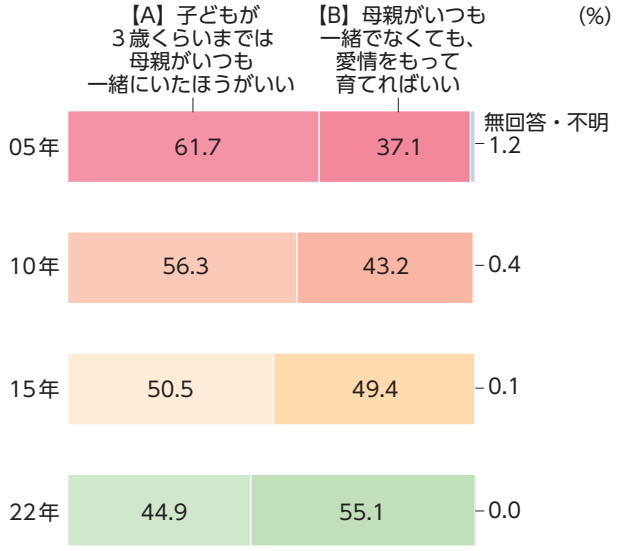


図2－4－2　子育て観：子育てと自分の生き方のバランス（経年比較）

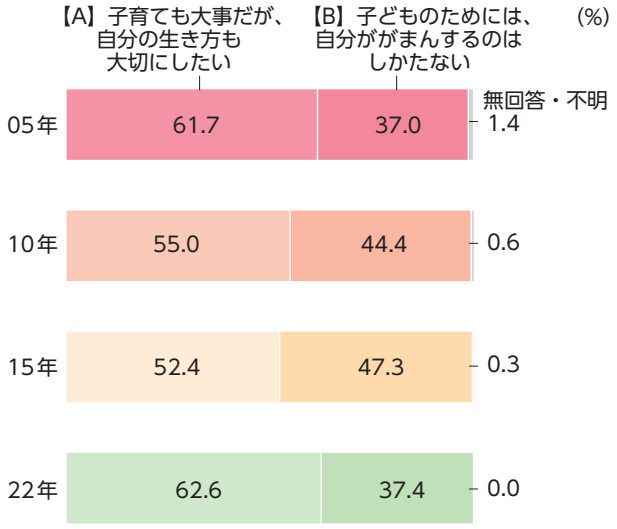
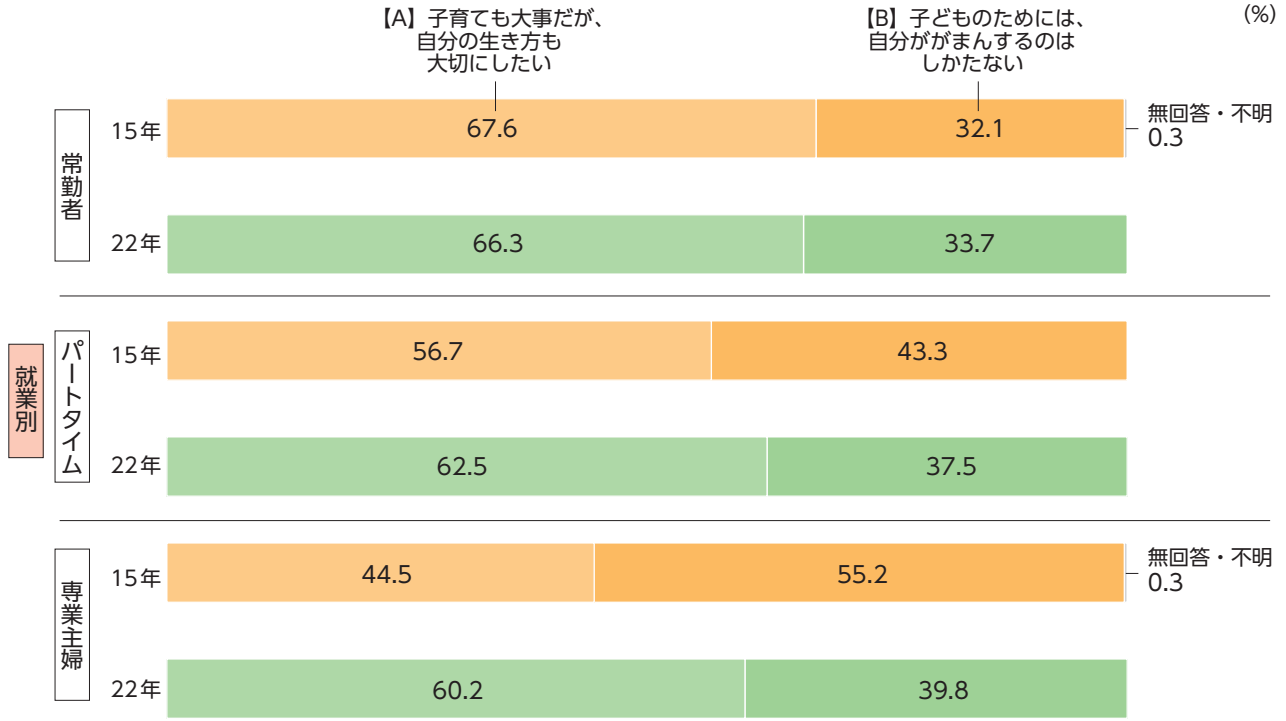


図2－4－3　子育て観：子育てと自分の生き方のバランス（経年比較・母親の就業別）



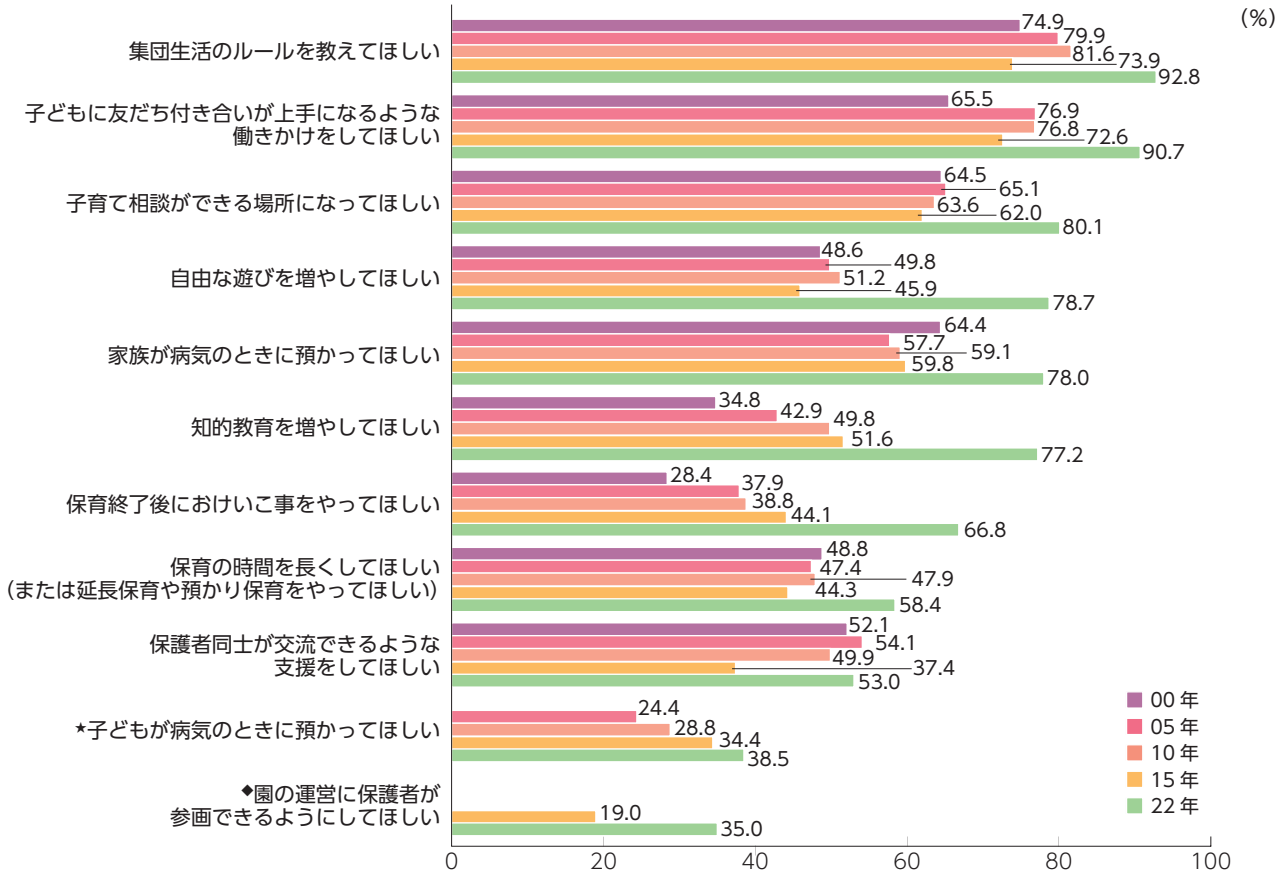
05年から徐々に、「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいたほうがいい」が減少している。22年には「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」といった価値観が半数を超え逆転した（図2－4－1）。また、7年前に比べて、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」は約10ポイント増加した（図2－4－2）。母親の就業別にみると、専業主婦において「自分の生き方も大切にしたい」は約15ポイント増加しており、常勤者・パートタイムと近い割合になっている（図2－4－3）。

15年に比べて、園への要望が大幅に増加

15年に比べて、園への要望が高まっている。とくに、「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と回答した割合は9割を超えている。また「子育て相談ができる場所になってほしい」も上位にあがっている。

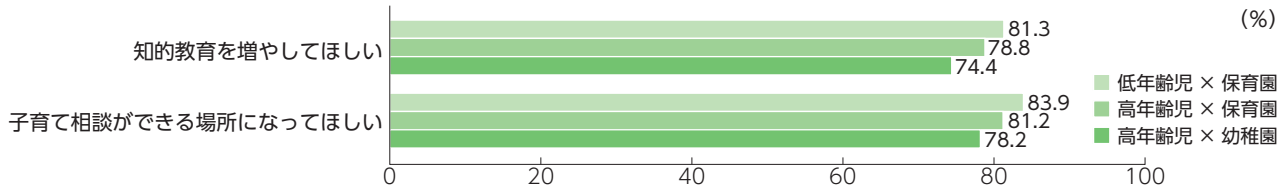
Q 現在通っている幼稚園・保育園などについて、あなたは次のことをどう思いますか。

図2－5－1　園への要望（経年比較）



※ 22年の回答比率が高い順に掲載。
※「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。
※子どもを園に通わせている人のみ回答。
※★は05年から聴取、◆は15年から聴取した項目。

図2－5－2　園への要望（22年　年齢・就園状況別）



※「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。　※差が見られた項目のみ表示。

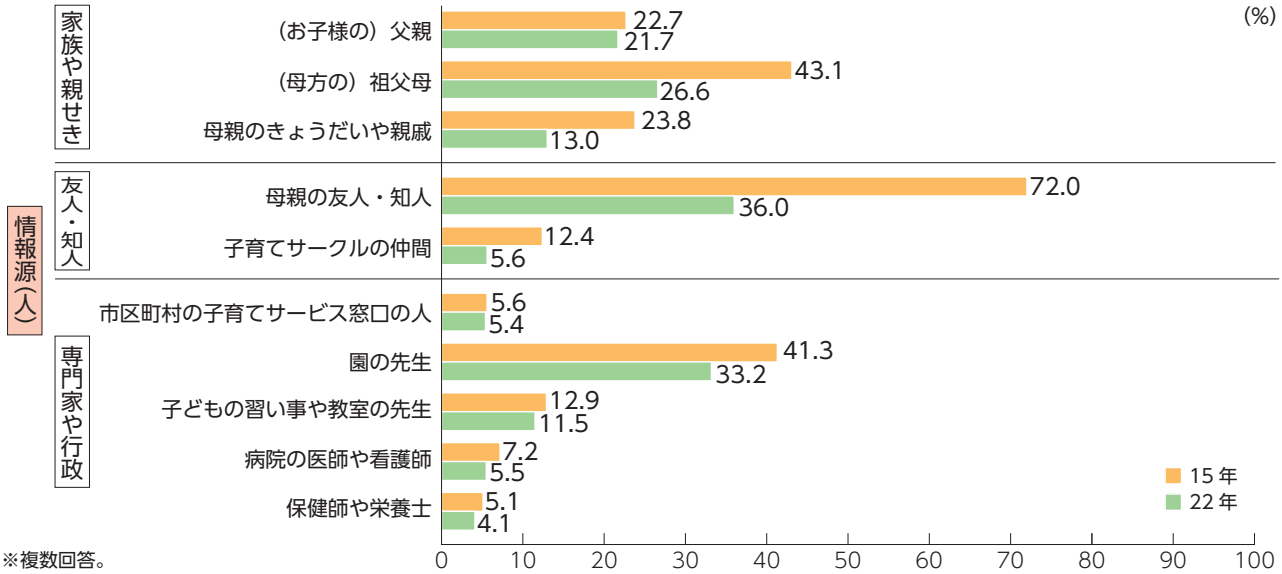
園に対する要望が7年前に比べて全体的に増加している。とくに「集団生活のルールを教えてほしい」（92.8%）「子どもに友だち付き合いが上手になるように働きかけをしてほしい」（90.7%）の要望が高く、次に「子育て相談ができる場所になってほしい」（80.1%）であった。知的教育や保育終了後のおけいこ事への要望も高く、前回から20～25ポイント増加している（図2－5－1）。子どもの年齢と就園状況別にみると、低年齢で保育園児の母親は、「知的教育を増やしてほしい」「子育て相談ができる場所になってほしい」が他群よりも高い（図2－5－2）。

しつけや教育の情報源は、「母親の友人・知人」「祖父母」が減り、「SNS」が増えている

15年に比べて、「母親の友人・知人」(72.0%→36.0%)「(母方の)祖父母」(43.1%→26.6%)から教育情報を得る機会が大幅に減っている。一方メディアは、「テレビ・ラジオ」「インターネットやブログ」「新聞」「育児・教育雑誌」などが減り、SNSを中心に情報を得ている。

Q 現在、あなたは「お子様のしつけや教育」に関する情報を誰から得ていますか。

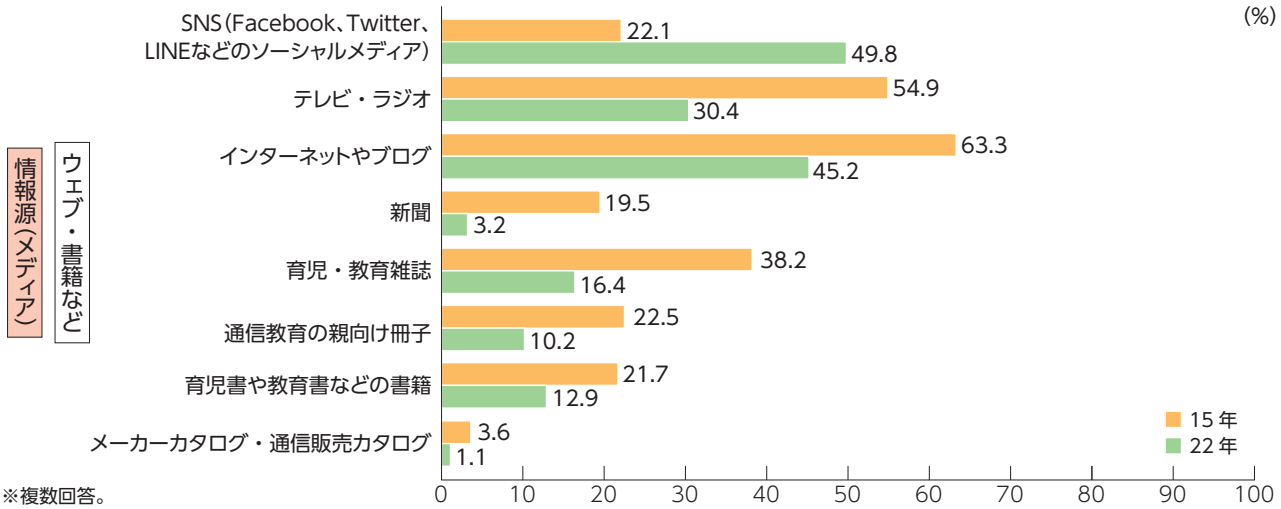
図2－6－1　しつけや教育の情報源【人】(経年比較)



※複数回答。
※「その他」を含む15項目の中から10項目を図示。

Q 現在、あなたは「お子様のしつけや教育」に関する情報をどこから得ていますか。

図2－6－2　しつけや教育の情報源【メディア】(経年比較)



※複数回答。
※「その他」は図示していない。

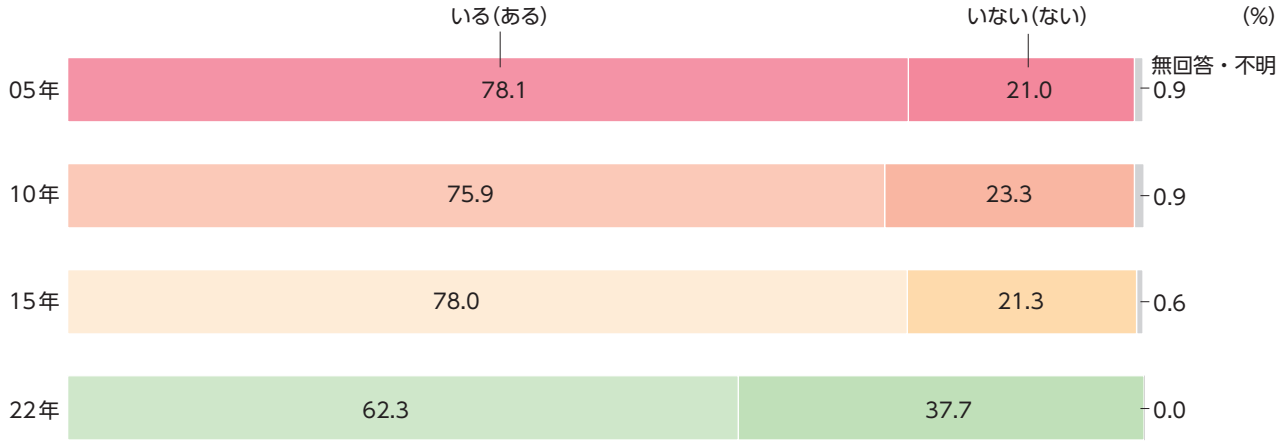
しつけや教育の情報源は、7年前と比べて全体的に減っている。大幅に減少した項目は、「母親の友人・知人」「祖父母」「母親のきょうだいや親せき」であり、コロナ禍もあり身近な人からの情報が集めにくくなっている。また「子育てサークルの仲間」「園の先生」も減少しており、子どもの情報共有や相談する機会も減っていることがわかる(図2－6－1)。メディアは、「テレビ・ラジオ」「インターネットやブログ」「新聞」「育児・教育雑誌」などが減少し、SNSのみが大幅に増加している(図2－6－2)。

母親が家をあけるとき、子どもの面倒をみてくれる人や機関・サービスは減少傾向に

15年に比べて、子どもの面倒をみてくれる人・機関が「いる（ある）」と回答した比率は、大幅に減少した（78.0%→62.3%）。とくに、「祖父母や母親のきょうだい、親戚」は約15ポイント減っている。

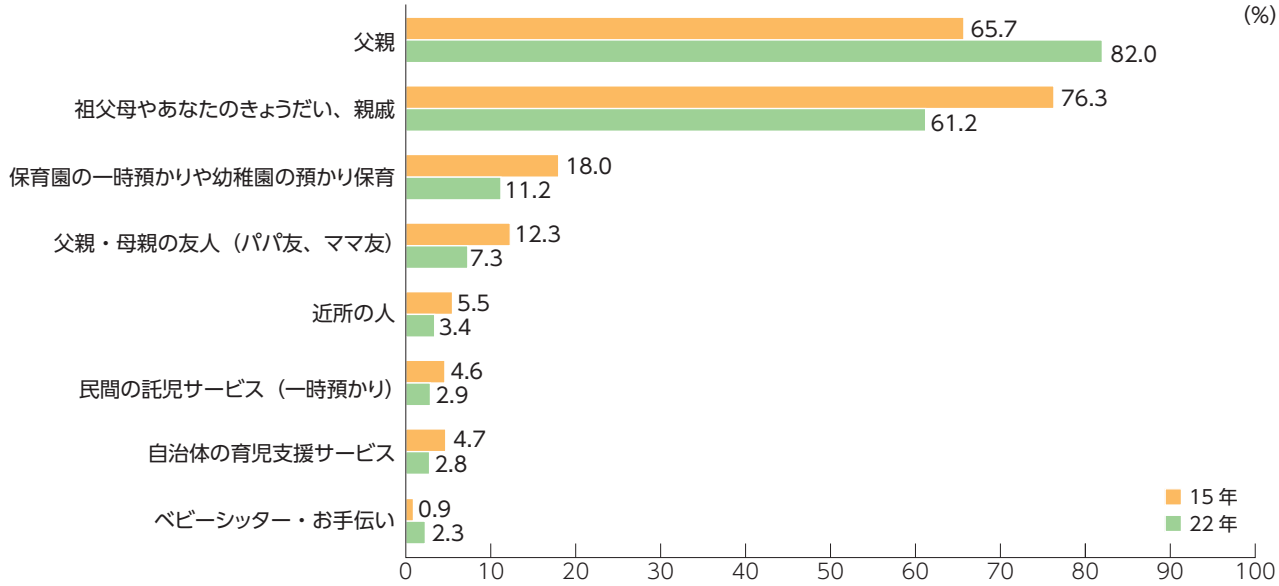
Q あなたが家をあけるとき、子どもの面倒をみてくれる人（機関・サービス）がいます（あります）か。通常、幼稚園・保育園などにお子様を通わせている時間は除いてお答えください。

図3－1－1　子どもの面倒をみてくれる人・機関の有無（経年比較）



Q 家をあけるとき、子どもの面倒をみてくれる人（機関・サービス）を教えてください。

図3－1－2　子どもの面倒をみてくれる人・機関（経年比較）



※子どもの面倒をみてくれる人（機関・サービス）がいる（ある）と回答した人のみ。
※複数回答。
※「その他」は図示していない。

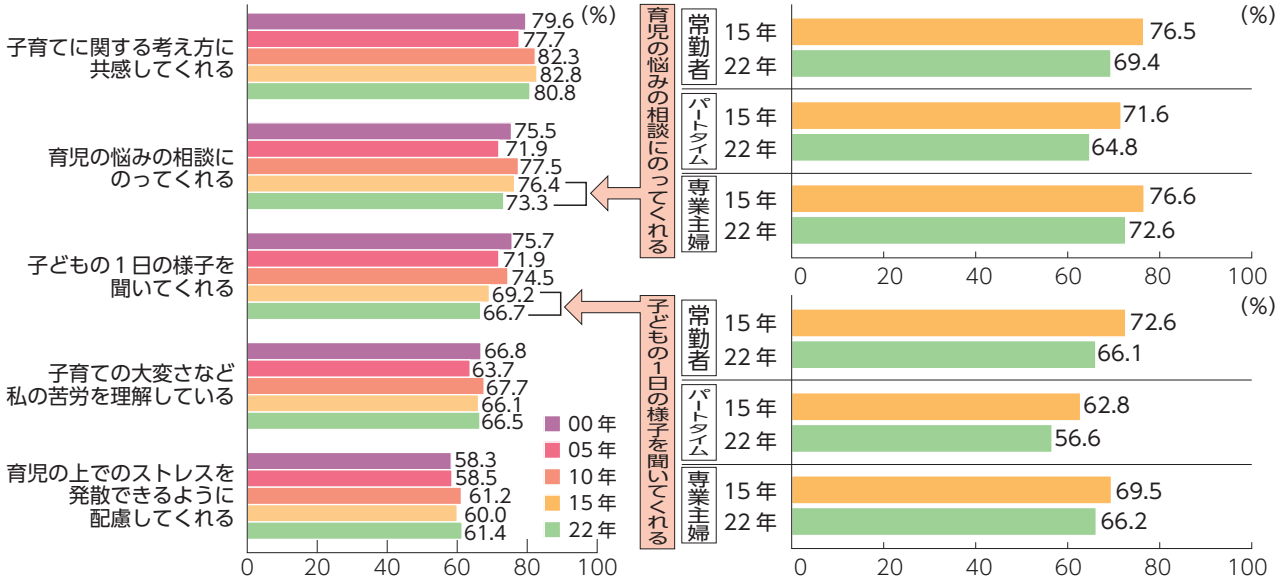
15年に比べて、子どもの面倒をみてくれる人・機関が「いる（ある）」と回答した比率は、約15ポイント減少した（78.0%→62.3%）（図3－1－1）。とくに、「祖父母や母親のきょうだい、親戚」が減っている（76.3%→61.2%）。また「保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育」を利用している割合も減っている。面倒をみてくれる人・機関が全体的に減少するなか、「父親」と回答した比率は8割を超えており、家族のなかで対応していることがわかる（図3－1－2）。

父親が「育児の悩みの相談にのってくれる」「子どもの１日の様子を聞いてくれる」比率は減少傾向

10年から22年にかけて、父親が「育児の悩みの相談にのってくれる」「子どもの１日の様子を聞いてくれる」比率が徐々に減少している。とくに、働く母親でそれらの減少幅がやや大きい。平日の父親の子育て・家事分担が「１割以下」の比率は、15年から22年にかけて減少している。

Q 父親に関して、あなたは次のことをどう思いますか。

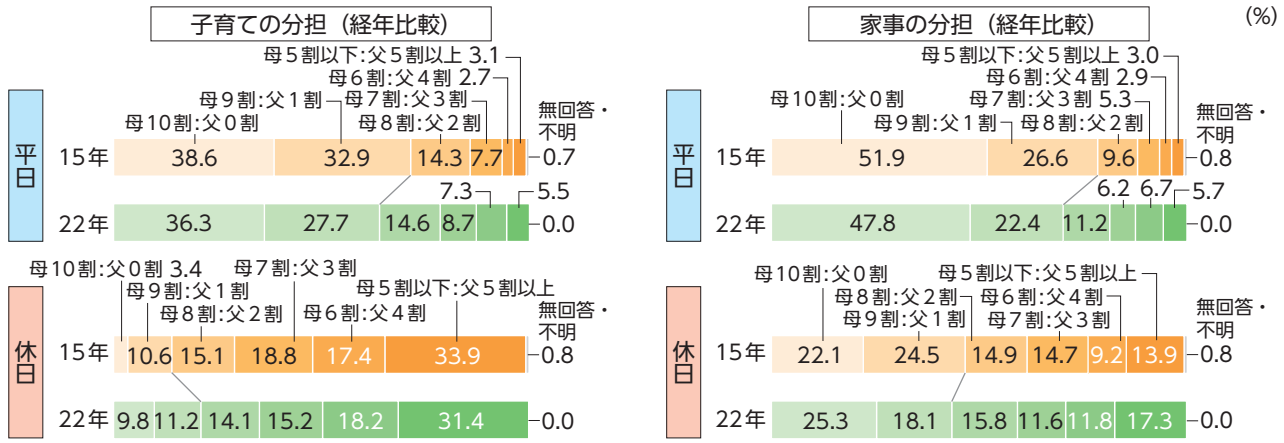
図３－２－１　父親の関与（経年比較）



※「とてもそう思う＋まあそう思う」の%。

Q あなたと父親の、子育て・家事の分担の割合は、どれくらいだと思いますか。
※『平日』は月曜日～金曜日、『休日』は土日祝日のこととしてお考え下さい。

図３－２－２　子育て・家事の分担（経年比較）

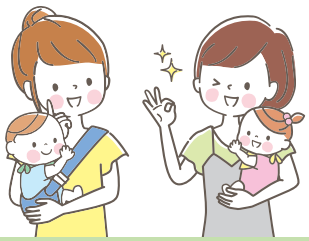


※「母５割：父５割」～「母０割：父10割」をまとめて「母５割以下：父５割以上」と表記している。

15年から22年にかけて、父親が「育児の悩みの相談にのってくれる」「子どもの１日の様子を聞いてくれる」比率が徐々に減少している（図３－２－１）。これを母親の就業別にみると、常勤者やパートタイムなどの働く母親で肯定率の減少幅が大きい。働く母親にとって、父親が子育てにかかわってくれている実感が得られにくくなっているのかもしれない。次に、子育て・家事分担についてみると、平日の父親の分担が「１割以下」（０割＋１割）の比率は減少している。一方で、休日の父親の子育て分担については、「１割以下」（０割＋１割）の比率が増加している（図３－２－２）。

子どもの成長・発達や子育てについて気になっていること
～自由記述より～

全 2,169 件の自由回答において、「子どもとのかかわり方」に関する回答が一番多く、508 件ありました。次に「子どもの発達」に関する記述が 396 件、子どもの発話に関する回答が 327 件でした。「新型コロナウイルス」に関する語が明記された回答は 165 件ありました。以下では、コロナ禍における子どもの成長・発達や子育てに関する悩みを紹介いたします。



子どもの成長・発達の悩み

■同年代の友だちとのかかわりが減少

・コロナ禍で児童ホームが閉鎖されてから、同年代の子どもと接する機会がなくなった。そのせいか今でも公園などで他の子が遊んでいて近くに来ると泣いてしまうほど、よその子に慣れてない。（低年齢児）

・幼稚園入学前は同年代とのかかわりが減っているので、子どもが集団生活のなかでどんなタイプの子なのかが全然わからない。（低年齢児）

・兄の頃よりもお友だちと遊ぶ機会がとても減ってしまい、小学校でお友だちや先生とうまくかかわっていけるか少し不安です。（高年齢児）

・コロナ禍で、学年ごとの活動ばかりで、上下の学年の子どもたちとの交流が少ないことが気になります。（高年齢児）

子育ての悩み

■子どもとのかかわり方

・思うように保育園に行けない日々が続くので、子どもも私自身もストレスがたまる。早く日常を取り戻したい。（低年齢児）

・コロナがはやってから、家に子どもと 2 人でいる時間が増え、自分の時間が減ってしまった。そのことでイライラしてしまうことも増えている。（高年齢児）

■子育て交流の減少

・コロナ禍で病院や市の講座がなくなったり、交流の場がなくなったり、これまでと状況が違うなかでの子育てに不安を感じる。（低年齢児）

・なかなか友人などと話す機会や出掛ける機会がなく、子育てに関する情報を集めにくい。（低年齢児）

・運動会や遠足や芸術発表会などのイベントがなくなった。お祭りや保護者会もなく、保護者同士のつながりがなく、希薄な関係のままである。上の子とだいぶ違う保育園生活になってしまい、仕方ないとはいえ残念に思っている。（高年齢児）

※低年齢児は 1 歳 6 か月～ 3 歳、高年齢児は 4 歳～ 6 歳を指す。

調査企画・分析メンバー

無藤　隆	（白梅学園大学名誉教授）
佐藤　暁子	（東京家政大学大学院客員教授）
荒牧　美佐子	（目白大学准教授）
高岡　純子	（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）
岡部　悟志	（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
持田　聖子	（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
酒井　晶子	（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
野﨑　友花	（ベネッセ教育総合研究所 研究員）

※肩書き・所属は、2022年9月時点のものです。

引用・転載については下記にてご確認ください。
https://berd.benesse.jp/application/

本調査のダイジェスト版は、
ベネッセ教育総合研究所のホームページからダウンロードできます

ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果も、こちらからご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所　検　索

https://berd.benesse.jp/

第６回幼児の生活アンケート ダイジェスト版
発 行 人：谷山 和成
編 集 人：加藤 健太郎
発 行 所：㈱ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
企画・制作：ベネッセ教育総合研究所
デザイン・編集協力：㈱縁

21TT02

© Benesse Educational Research and Development Institute
※無断転載を禁じます